

国史跡高宮廃寺跡

内容確認発掘調査概要Ⅱ



寝屋川市教育委員会

平成 27 年 3 月

序

寝屋川市の高宮二丁目には延喜式内社の大杜御祖神社（おおもみおやじんじゃ）が鎮座しています。境内には古くから古瓦や礎石が散在し、東塔跡の土壇と心礎があることから古代寺院の存在が知られていました。この土壇に破壊の危機が生じたため、昭和28年に大阪府教育委員会が東塔跡の発掘調査を行いました。また、昭和54年には境内地北側の民有地において宅地造成の計画が持ち上がり、再び遺跡が破壊される事態が想定されたことから寝屋川市教育委員会による寺域全体の範囲確認調査が行われ、その成果を踏まえて、翌55年に国史跡の指定を受けることとなりました。民有地については、その後公有地化が行われ、2度の破壊の危機を免れた高宮廃寺跡は史跡指定後、現状での保存が図られています。

このたび高宮廃寺跡の整備・活用に向けて、平成25年度から過去の調査地の再発掘を含めた内容確認発掘調査を実施しております。

調査にあたり、ご協力をいただいた大杜御祖神社、大字高宮財産管理委員会、地元自治会及びご指導・ご助言をいただいた文化庁、大阪府教育委員会、寝屋川市文化財保護審議会、調査指導者の各先生をはじめ関係各位に感謝の意を表するとともに、今後とも本市の文化財保護行政に一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

寝屋川市教育委員会
教育長 高須 郁夫

例言

1. 本書は、寝屋川市教育委員会が、平成26年度国庫補助（総額2,935,600円、補助率：国1/2）を得て実施した寝屋川市高宮二丁目所在の国史跡高宮廃寺跡内容確認発掘調査の概要報告書である。
2. 現地調査は、平成26年11月10日に着手し、平成26年12月26日に完了した。
3. 調査の実施にあたっては、文化庁・大阪府教育委員会・寝屋川市文化財保護審議会及び網伸也氏（近畿大学）・鷲森浩幸氏（帝塚山大学）・箱崎和久氏（奈良文化財研究所）・菱田哲郎氏（京都府立大学）の指導を得た。
4. 調査の過程で、下記の方々に有益なご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）
山下信一郎 中西裕見子 大脇潔 広瀬雅信
5. 発掘調査及び本書の執筆と編集は寝屋川市教育委員会事務局社会教育部文化スポーツ振興課丸山香代が担当した。

はじめに

国史跡高宮廃寺跡は、寝屋川市の南東部、生駒山地から南西に派生する香里丘陵（標高約 30 ～ 50m）の南端に立地している。当廃寺の周辺には古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落（高宮遺跡）が広がっており、高宮廃寺を創建した古代氏族の居住域と推定される。

史跡指定地は、大部分が延喜式内社の大杜御祖神社の境内地である。現在、西塔跡と推定されている位置に江戸時代に建てられた社殿が鎮座しており、旧宮地伝承地が神社の北東約 50m に残されている。



図1 寝屋川市の位置



図2 国史跡高宮廃寺の位置

これまでの調査

高宮廃寺跡の最初の調査は、昭和 28 (1953) 年に大阪府教育委員会により行われた。境内地に残されている土壇が土取りにより破壊の危機に瀕したため、遺跡全体の地形測量と東塔跡の発掘調査が実施された。この調査では出土した瓦から寺院の創建が白鳳期と判明し、さらに寺院の伽藍そうとうしきがらんはいちが双塔式伽藍配置であると推定された。¹

昭和 54 年には、寝屋川市教育委員会が寺域全体の範囲確認調査を実施し、主要な伽藍の建物跡を確認した。この時確認された遺構は、回廊の北西隅と北回廊・東回廊の一部、金堂基壇²、講

1 藤沢一夫『大阪府の文化財』「高宮廃寺の発掘調査」 1962年8月 大阪府教育委員会

2 基壇：周辺の地盤より高く土を盛り上げて建物の基礎としたもの。

堂基壇、中門の一部である。³

平成 25 年度から寝屋川市教育委員会では高宮廃寺跡の管理活用計画の策定に向けて、過去の調査地の再発掘を含めた内容確認発掘調査を行っている。平成 25 年度の調査では、昭和 54 年に調査した金堂跡と東回廊の再発掘のため、旧トレンチを拡張するとともに新規トレンチを設けた。これにより、金堂基壇の北東隅を検出し、基壇を造成する際の版築⁴状況を確認した。さらに、基壇上面より礎石抜き取り痕跡を検出し、金堂の建物規模が判明した。⁵

平成 26 年度の調査成果

今年度は東回廊跡（1ヶ所）・中門跡（1ヶ所）・南門跡（2ヶ所）・史跡南部分（2ヶ所）の内容解明に向け、計 6ヶ所の調査区を設定した（3 ページ図 3）。

1 東回廊調査区（写真 1～4）

昭和 54 年の概報によると、東回廊跡については「基底部の幅約 4.8m の基壇を検出。基壇の東半分は後世の削平のため基底部の一部を残すのみであった」と報告されており、平成 25 年度の調査でも同様の基壇を確認したが幅が未確定であった。

平成 26 年度の調査では基壇の幅を確定するため、平成 25 年度調査した旧トレンチから北へ約 7 m の位置に新規トレンチを設けた。

調査の結果、基壇の東側・西側の立ち上がり部分を検出し、幅が 2.8m であることを確認した。回廊の基壇とするには幅が狭く、その規模から築地塀あるいは掘立柱塀の基底部と考えられる。しかし、堰板や添柱など築造に関連する痕跡は検出しなかった。

一部断ち割り調査を行った結果、西側部分は地山⁶を削り出した後に盛り土を、東部分は地山上に盛り土を行っていることが明らかになった。盛り土には橙色砂質土や明褐色砂質土を用いている。



写真 1 平成 25 年度再調査の東回廊旧トレンチ
（南より）



写真 2 東回廊調査区全景（北西より）

3 『高宮廃寺発掘調査概要報告』寝屋川市文化財資料 2 1980 年 3 月 寝屋川市教育委員会

4 版築：強固な基礎を作るため、種類の異なる土を交互に突き固める作業。

5 『国史跡高宮廃寺跡内容確認発掘調査概要 I』2014 年 3 月 寝屋川市教育委員会

6 地山：盛り土・表土・堆積土などに対し、自然のままの地盤のこと。

Y=-33120

Y=-33110

Y=-33100

Y=-33090

Y=-33080

Y=-33070

Y=-33060

Y=-33050

X=-137930

X=-137940

X=-137950

X=-137960

X=-137970

X=-137980

X=-137990

X=-138000

X=-138010

X=-138020

金堂跡
(平成25年度調査)

← 金堂基壇想定規模

大杜御祖神社
社殿

東回廊調査区

写真2

← 写真3

写真4

東回廊旧トレンチ
(平成25年度調査)

写真1

写真5

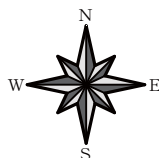
中門調査区

← 写真6

写真7

塀と想定するライン

南門調査区



史跡南1

史跡南調査区

写真8

史跡南2

※  は基壇検出箇所

図3 平成26年度調査区配置図 (S=1/400)



写真3 塚の基底部（南東より）



写真4 北西側断ち割り断面（南より）

2 中門調査区（写真5～7）

まず、旧トレンチの再発掘を行った上で、調査区を南北に拡張した結果、中門基壇の一部を確認した。南部分は現在境内を東西に横切る市道に近接しており、後世の攪乱により大部分が破壊されていたため、中門の南限を確認することはできなかった。

今回確認できた基壇の範囲は、残存長で東西約2.5m、南北約1.7mである。そのすぐ北側では整地土の上から掘り込む遺構を検出した。旧トレンチ部分ではこの遺構はすでに破壊されており、どのような形態をしているか不明である。東西に溝状にのびる遺構になるとするなら、基壇に関連する可能性も考えられる。

中門基壇も版築工法により築造されており、基底部分は黄橙色砂礫土（地山）と明褐色土、その上面は明赤褐色砂質土と明褐色粘質土を用いた版築を行っている。



写真5 中門調査区全景（北より）



写真6 中門基壇の版築状況

3 南門調査区

既往の報告で推定されている南門跡と中門跡の間に、幅2mのトレンチを2本設定した。

いずれも表土掘削後、包含層を除去し地山面まで掘削を行ったが、南門に関連する遺構は検出されなかった。現在推定されている南門の位置は今回設定した史跡南調査区周辺で



写真7 中門基壇北側の遺構（南より）

あるが、中門から南門までの間隔の広すぎる
ことから疑問視されており、位置や存在につ
いては今後調査していく。

4 史跡南調査区 (写真8)

史跡指定地の南側に設けた史跡南調査区で
は、丘陵南端部分の土地利用や土層確認のた
め、旧トレンチの再発掘と拡張を行った。

既往報告では史跡南2調査区のすぐ西側で
地山を切り込んだ基壇状遺構を検出している

が、史跡南2調査区からは基壇と考えられる遺構は確認できず、ピット4基とL字型の溝状遺構1条を確認するに留まった。遺構面直上の包含層から出土した遺物から、遺構の時期は奈良時代が下限と考えられる。



写真8 史跡南2調査区北部分(北より)

出土遺物について

昭和54年度と平成25年度の調査において出土した
遺物の量はコンテナ数(縦59、横38、深さ14cm)で
示すと、中門地区で12箱、東回廊地区で24箱である。
今回の出土量は中門調査区で10箱、東回廊調査区で
14箱、南門調査区で2箱、史跡南調査区で1箱であっ
た。遺物の大半が瓦であり、少量であるが須恵器片や
土師器片も確認できた。瓦の種類は平瓦・丸瓦がほと
んどであり、現在整理中であるため、ここではその中
から抽出した軒瓦と道具瓦の報告を行う。

ふくべんしやうれんげもんのみまるがわら
○複弁四葉蓮華文軒丸瓦(写真9)

東回廊調査区で8点、中門調査区で3点出土した。
主要伽藍各所から出土する軒丸瓦で、周縁に線鋸齒
文、外区には珠文を配する。胎土は密で、色調は褐灰
色又はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

きんせいからくさもんのきひらがわら
○均整唐草文軒平瓦(写真10)

東回廊調査区で8点、中門調査区で1点出土した。
周縁、外区に文様は見られず、顎形態は曲線顎であ
る。胎土は砂を少量含み、色調は褐灰色もしくは灰白
色を呈し、焼成はやや軟質である。

○均整唐草文軒平瓦(写真11)

東回廊調査区より1点出土した。
周縁、外区に文様は見られず、顎形態は破片のため
不明である。胎土は粗く、色調は灰白色で焼成は硬質
である。



写真9 複弁四葉蓮華文軒丸瓦



写真10 均整唐草文軒平瓦



写真11 均整唐草文軒平瓦

しび
○鴟尾（写真 12）

中門調査区より 2 点出土した。

今回出土した破片は頭部の一部と考えられる（図 4）。表面はにぶい橙色、内面は橙色を呈している。厚さは 2.9～4.1cm で、2 片を接合した残存高は 14cm である。



写真 12 鴟尾（左：側面より、右：内面より）

🍷 まとめ

これまで高宮廃寺跡の伽藍配置については中門から回廊が派生し、金堂や塔を取り囲む形が想定されていた。しかし、東回廊と考えられていた部分が築地塀あるいは掘立柱塀であることが明らかになった。築地塀の例としては相模国分寺跡などにも見られる。今年度の調査により高宮廃寺の中心伽藍の東限が確定されただけでなく、地方寺院の実態解明に向けての一つの成果となった。今後、北面、南面、西面の調査を行い、高宮廃寺の全体像を解明していきたい。

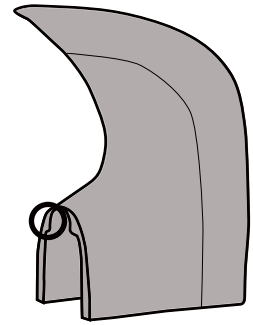


図 4 鴟尾片推定箇所

報 告 書 抄 録

ふりがな	くにしせきたかみやはいじあとないようかくにんはつくつちょうさがいよう							
書名	国史跡高宮廃寺跡内容確認発掘調査 概要Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	丸山香代							
編集機関	寝屋川市教育委員会事務局 社会教育部 文化スポーツ振興課							
所在地	〒572-8555 大阪府寝屋川市本町1番1号							
発行年月日	2015 年 3 月							
ふりなが 所収遺跡名	ふりなが 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くにしせき 国史跡 たかみやはいじあと 高宮廃寺跡	おおさかふねやがわし 大阪府寝屋川市 たかみや 高宮二丁目 おおもりみおやじんじやけつだい (大杜御祖神社境内)			34° 45' 20"	135° 38' 18"	2014年 11月 ～12月	166.85	内容確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
国史跡 高宮廃寺跡	寺院跡	白鳳時代～平安時代		中門基壇 築地塀あるいは 掘立柱塀		瓦 土師器		